

## クロフト・ナショナル・スクール創立事情

笠井勝子

英国では1870年に小学教育法が制定されたときには、すでにNational Societyすなわち英国国教会の運営する小学校と、The British and Foreign School Societyの運営する非宗門の小学校があった。前者は国教会の宗教教育を柱とするもので、ナショナル・スクール、後者をブリテイッシュ・スクールといった。

クロフト・ナショナル・スクールは1846年に教区の主任牧師であるチャールズ・ラトウィッジ・ドジスン師の尽力によって創立された。ドジスン師はルイス・キャロルの父親で、この学校創立に関わる事情もキャロルの背景の一部として、調べたものである。資料はダーリントン公立図書館所蔵の冊子で、*A Short Account of the First Establishment of the Croft National School, in The Year 1845 by The Rev. Charles Dodgson, Rector of Croft, Darlington. Printed at The office of Coates and Farmer. MDCCCXLVI.* による。

ドジスン師がクロフトに任命を受けるまでの経緯はアン・クラーク・アモアのルイス・キャロル伝に次のように説明されている。

リボン大聖堂の主教ロングリーは予てから、ドジスンの人物と才能とグーズバリ教区における献身的な働きを認めていた。9人の子供を抱えて貧しい教会禄を助けるために、ドジスン師は牧師館で生徒を教えて収入を補わねばならなかった。彼の昇進を心に掛けていたロングリーは、クロフトの牧師が病没して、

その席が空くや即座にロバート・ピールにその地位をドジスンに与えるように請願の手紙を出している。主教ロングリーの他には、ウォークリフ男爵ジェイムズ・アーチボルド・スチュアート=ウォートリ=マッケンジー、リボン伯爵フレデリック・ジョン・ロビンソン、地元の国会議員ジョン・ウィルソン・パットン、フランシス・エガトン卿といった人々が首相ピールに向けて一斉にドジスン推薦の手紙を出した。そのことに関しては、アン・クラーク・アモアが次のような微笑ましい記述をしている。“A nineteenth-century Prime Minister had far less political business than his modern counterpart, but as Sir Robert waded through his pile of letter nominating Mr Dodgson for the post, replying personally to each in his small, neat handwriting, his patience understandably wore thin.”

主教ロングリーにチャールズ・ドジスンを選任した旨を告げるピールの返事には、その選択が誰の推薦による所為でもなく、本人の高邁な人物と業績によるものである、と強調している。“I have determined, purely on the rounds of his very high character and attainments, and professional Services within the Diocese of Ripon, to prefer the Rev'd Charles Dodgson to the numberless Competitors with him for the Living of Croft in the North Riding of Yorkshire.” “Excuse me for saying that I wish I had been left at liberty to make my selection of Mr Dodgson (which I was perfectly prepar-

ed to do) on the single ground of his merits had claims — without the intervention of various Colleagues of mine and Members of Parliament who have been urged to address me in favour of Mr Dodgson, necessarily involving me in a very extensive correspondence and not influencing my decision.”

手紙の前半は結果を通知するものであるが、「失礼ながらいわせて貰えば…」で始まる後半部分は、明かに苛立ちを見せている。しかし、この手紙を受け取ったロングリーの方は気の毒と思うどころか、にやっと笑ったものであろう。

チャールズ・ドジスン本人に宛たピールの手紙はもちろん苛立ちなどどこにも見えない温かいものであった。“There is no part of my public Duty which is more gratifying to me, than the appropriation of such Church Patronage as may be at my disposal, to the Reward and Encouragement of active professional Exertions by men of unblemished private Character and great intellectual attainment. In conformity with this principle, and exclusively upon the ground of your professional services and claims, I have resolved to appoint you to the Living of Croft in the North Riding of Yorkshire.” 1843年ドジスン師はチェシャー州の片田舎ダーズバリのオール・セインツ・チャーチからクロフトへ着任した。この時43歳である。

当時クロフトの町の人口は700人。しかしクロフトの教区の方は周辺の町ドルトン、またステイプルトンの一部、それにホルナビー、ジョルビー、ウォルマイアーといった村落を抱えている。ティーズ川にまたがるクロフトは、ヨークシャー州とグラム州の境に位置し、境になる橋は、「古代からの頑強な6本の石の

柱」(橋げた)に支えられた見事なもので、南側の欄干にヨークシャー州、北側の欄干にはグラム州の紋章がついている。前者のノースライディング地域の首都ノーサトンからダーリントンに向かう当時の幹線道路がこの橋を通過してティーズ川を渡る手前に、聖ペテロ教会がある。ドジスン師の新しい任地は交通の要衝に位置していた。

地位の昇進は経済状態の好転にも繋がった。クロフトの聖職禄は、ドジスン師が弟のハッサード・ドジスンに宛た手紙によると、合わせて1050ポンド10シリングであった。この中から教会に関わる費用と思われるものが、年間140ポンド11シリング10ペンス。これを差し引けば1年に約900ポンドの年収を得たことになる。11人の子供達の将来を考えたとき、男の子のためには、自分の死後困らないように保険を掛けておくよりも、教育に掛けて置くほうがよい、ということを手紙に書いている。その後で、クロフトについて、次のような記述がある。

“The country about Croft seems pretty, though not strikingly so, at least I was not particularly struck by it during my short sojourn of half a day ; but we know that it is in the neighbourhood of striking Scenery, being only 10 miles from Richmond. I observed several Lodging houses, but they looked small, and there is also a good sized Hotel, I was told that the place is going fast out of fashion as a watering place” (きわめて短い訪問だったので、余りよくはわからないが、取り立ててとはいわないまでも、周辺の景色はきれいなところだと思う。リッチモンドからは10マイル程のところだし、かなり大きなホテルもある。良水の地としては急速にさびれていると、聞いた。)

しかし、彼は教区として考えたとき、定住

しない保養や湯治のための客はよいことはない、と判断して、取り残されてゆく町の状態を、特に残念とは考えていない。

クロフトの教会は牧師館からは木々に遮られて見えないが、小道を挟んで隣接している。牧師館の住まいと教会がどんなに離れていようと、日曜日には家中で、使用人も含め揃って朝と午後の礼拝に、全員で出席していたドジスン家の人々にとって、これまでのダースバリのモーファニーレインにある牧師館が、教会から片道1マイル半離れていたこと、そこへはどんな天候の中でも日曜毎に2往復していたことを考えると、便利になった。

聖職者として、毅然とした姿勢をもつドジスン師には、クロフトの教会の状態は改善すべき点が多々見えた。“There will be much to be done in the way of improvement — there is only one Sermon, & as is generally the consequence, the Church attendance almost entirely confined to the Morning Service. There are also no more than 35 Children under Church, or indeed any Religious Education, in a population of 700 and upward. The Sacrament is administered only 5 times a year ...” 「説教等は1日一回、その結果として、教会への出席は朝の礼拝に限られてしまう。さらに、700人を上回る住民の中で、教会に来ている子供たちは、言い替えば何らかの宗教教育を受けている子供たちは、わずか35人である。聖餐式は年に5回おこなわれるだけ」と書いている。ドジスン師は明かにこれを憂うべき状態と受け止めた。

ダースバリでは、地元の運河生活者が教会に通って来ないため、彼は領主に働きかけ、舟を1艘手に入れると改修し、「水上教会」と名付けて、日曜日の午後は自分が出向いてそこで礼拝を行っていた程であるから、教区の住民の教会生活に対する彼の熱心は、新任

地クロフト教区のために当然ながらじっとしては居られなかった。

主教ロングリーはじめ多くの知名人がドジスン師のために首相ビールに対して働きかけたという事実も、こうした彼の熱意と貢献が広く知られていたためである。ドジスン師はその期待に答えて余りある働きをした。その一つがここに取り上げたクロフト・ナショナル・スクールの実現であった。

ナショナル・スクールはナショナル・ソサエティが設立した学校で、1812年には52校あった。さらに1861年には、この初等学校は国中至る所に見られるようになっていた。

ナショナル・ソサエティとは、貧しい家庭の子ども達の教育を行なう目的で1811年に設立された。正式の名称はThe National Society for Promoting the Education of the Poor in the Principles of the Church of Englandといい、その名が示す通り英国国教会の方針に基づいて教育をおこなう小学校である。

クロフト・ナショナル・スクールの場合その設立にあたって、教区主任牧師のドジスン師が土地を提供し、建物の建設費の半分を自ら寄付し、さらに初年度の設備費の大半と年間維持費を保証するという形で発足した。赴任して翌年の秋には定礎式を執り行うというあたり、ドジスン師の教区にかける熱意、意気込みの現われであったろう。1846年に印刷させたドジスン師の小冊子、クロフト・ナショナル・スクールの報告書で詳細を見てみよう。それは次のようなことばで始まっている。

「1844年初頭、クロフトの主任牧師チャールズ・ドジスン師は自分のグリーブ・ランド(Gleve Land)の一部をナショナル・スクール建設地として提供することとした」(Gleve Landとは土地の形状が巾広の刀、glaiveに似

ているところからついた名称といわれる。Glebeはこのglaiveの古語、また方言の中に残っている。)

この学校の目的は、

- 1) 英国国教会の教義と原理とに従って、教区の牧師の指導と監督の下に、児童をキリスト教の知識で訓育すること。
- 2) 児童には、その他の有用なこと、読み書き、算数、及び女子には裁縫を教える。

建物については、校舎の設計をグラムの建築家、ボノミ氏とコーリー氏が行ない、建設に関わる契約は次の人々と取り交わした。ダーリントンの石工ロブスン氏、大工のレイフィールド氏、排水工でガラス職人のジョンソン氏。定礎式は、1844年10月21日でリポンの主教猓下が最初の石を置いた。そして翌年の1845年10月7日に開校した。

校舎と運動場については、一つの建物の中に2つの学校をおいた。すなわち、男子校と女子校で、各々60名の生徒(Scholars)を取容できる。教室の広さは、男子用、女子用、共に長さ21フィート、巾が19フィート、高さは床から立ち上がって屋根の付け根の長方形部分まで、11フィート、最高部の天辺では、17フィート6インチあった。

男子用、女子用の教室は独立しており、各々別個に運動場がある。運動場の広さは両方合わせて、1500平方ヤード(約1.35平方キロ)あった。

学校の土地と建物については、リボン主教とリッチモンド教会の大執事、およびそれらの継承者に永久に譲渡する。但し、この人々は受託者であるが、学校の管理運営には関わらない。

管理計画としては、学校の監督および男性、女性の教員の任命と解雇は主任牧師の権限で行なう。このことによって、牧師は真に良い成果となるよう監督を行ない、怠慢或いは監督の誤りによって、教会役員会や基金の寄附者らから、主教官が行なう学校視察の際に苦情を訴えられることのないように、あらゆる注意を払わねばならない。

授業料については、週単位で納付し、額は次の通りである。

1 家族あたり 1 名の生徒の場合	……	週 2 ペンス
同	2 名	…… 3 ペンス
同	3 名かそれ以上	…… 4 ペンス

ナショナル・スクールは貧しい家庭の児童を対象としており、そのために学校は衣料部を設けた。少額を毎週積み立ててそれに補助を加えて、年度の終わりに衣服を求めることができるようにする、というもの。積み立てのメンバーはこの学校の生徒に限られ、毎週1ペニー以上の払い込みということで、額はいくらかでも受け付ける。それに払い込んだ回数と児童の出席、品行の良さに応じて、無償で補填を行なう。年度の終わりには各々の会員は、ダーリントンの店なら両親が選んだところでどこでも、積み立てた金額に見合った衣服を注文することができる。

学校の開設時にかかった教室備品、用具のための費用は、建築の場合と同様に、これは当初の見積りをはるかに上回ったが、それも多くのひとの寄付金による協力で支払ができた。ナショナル・ソサエティは初め50ポンドとさらにそれに25ポンド上積みして合計75ポンドの補助を出し、また、Privy Councilの教育委員会からは当初予算の70ポンドにさらに30ポンドの上乗せをして合計100ポンドの補助を出した。即ち、公的な機関からの援助は

合わせて175ポンドあった。  
それに対して支出の方は、

	£	s.	d.
建設予定地からの牛舎の移動、 地取り、敷地の囲い等	37	2	6.5
建設費 (含塗装、内装)	329	18	6
教科書、石板、雑費	25	15	2
設計士費用	19	15	0
法手続料	9	16	2

合計で422ポンド7シリング4.5ペンス掛かっている。公的補助を除いた残りの247ポンド7シリング4.5ペンスの費用をどうしたか、といえば、そのうち232ポンド7シリング4.5ペンスを個人の寄附で賄い、15ポンドは1944年の10月20日にクロフト教会に於ける献金からきた。

個人の寄附232ポンド7シリング4.5ペンスの内121ポンド17シリング4.5ペンスは主任牧師ドジスン師自らの寄附。さらに、彼の親族からは弟のハッサード・ドジスンや妻の側ではラトウィッジ家の2家族らが、合わせて52ポンド10シリングを寄附。ドジスン師とその親族を合わせると、173ポンド27シリングの額となり、それは公的補助の額とほぼ同じである。

一方、建物、備品に加えて維持管理費の方は、初年度1845年については、リポンの主教をはじめとする28名が寄附の名簿に載っている。ここでも主任牧師ドジスン師は30ポンドを出している。夫人の方は、5ポンド。ちなみにリポンの主教は2ポンド2シリングで、28名の合計額は75ポンド2シリング6ペンスである。

男子校、女子校合わせた年間支出は、それぞれその教育を担当する責任者、男性教師の年間給与が60ポンド、女子教師の年間給与が27ポンド。どちらもヨークの教員養成機関の出

身である。こうした人件費の他に、教科書、施設備品の修理費、その他通常並びに臨時に掛かる費用が年間100ポンド見込まれる。この費用についても、当分の間は、主任牧師が出す、ということでドジスン師の負担額にはさらにこの百ポンドが加わっている。

児童を持つ家庭の負担はまったくの零ではなく、先に述べた額で、1家族あたりの負担額が子供の人数に合わせて、大きくならないように配慮されている。その収める額の合計が、年間で20ポンドと見込まれる。

この他には、ウィリアム・チェイスター卿の自由になるもので、毎年クロフト教区の教育の目的のための費用が、4ポンド4シリング4ペンスあり、卿はこれをクロフトナショナル・スクールの男子教師の手に預けた。

残りの年間経費は寄附と維持会費によってまかなわれる。

さて、ここで疑問の点は、ウィリアム・チェイター卿が、男子教員に教区の教育費を預けたことである。クロフト・ナショナル・スクール創立を着想し、土地を提供し、建物の費用、維持管理にわたるまで、物心両面における主たる役割を果たした貢献者で、また監督責任者の立場にある教区主任牧師ドジスン師ではなく、いわば被雇用者である教員に、任せたのである。通常ならば、監督責任者を通して経費の運用が行われるところであろう。実は、チェイター卿とドジスン師の間には、大きな溝、対立があったことが、キャロルの日記からわかっている。

1856年のルイス・キャロルの日記には、次の記述がある。

Dined with Mr. John Chaytor, the first time I ever did such a thing. I met Mr. and the younger Mrs. Johnson, and Mr. Simpson. I enjoyed the party better than I

expected.

「ジョン・チェイター氏と食事をした。こんなことをしたのは初めてだ。ジョンソン氏と息子さんの奥さん、それにシンプソン氏に会った。思ったよりも一緒に時間を過ごして楽しい人たちだった。」

「こんなことをしたのは初めて」と言っているのも、父親同士の対立があったからである。日記の編註者エドワード・ウエイクリングの註によれば、ジョン・チェイター氏はウィリアム・チェイター卿の次男であり、キャロルより26歳年長の法廷弁護士だった。註にはさらに、次のような指摘がある。

Sir William disagreed with the building, design, management and trusteeship of the new school at Croft established by Archdeacon Dodgson soon after taking up his position as Rector.

以上、本文は先の会計報告で終わり、付録

として2つの事項が述べてある。付録1は、ナショナル・ソサエティの傘下の学校として、英国国教会の方針に従う宗教教育の徹底を旨とする規約6項目。付録2は指導と責任が公正厳正に行われることを旨とする7項目である。

#### 〈参考文献〉

*A Short Account of the First Establishment of the Croft National School* by The Rev. Charles Dodgson, Rector of Croft, Darlington, 1846.

*Lewis Carroll's Diaries* volumes 1 & 2 edited Edward Wakeling 1994.

*Lewis Carroll : A Biography* Anne Clark 1979, J.M.Dent & Sons.

*Lewis Carroll : Child of North* Anne Clark Amor, St. Peter's Church, Croft, 1995,

*Lewis Carroll*, Derek Hudson, 1954.

*The Life and Letters of Lewis Carroll* S. Dodgson Collingwood, 1898.

T. Fisher Unwin.

「イギリスの生活と文化事典」研究社